

特別支援学校における学習評価の考え方や進め方に関する研究・開発 ～知的障害教育における観点別評価を活用した指導と評価の一体化に向けて～

令和5年2月7日
教育庁指導部

I 研究主題設定の理由

1 学習評価の充実

平成29年改訂特別支援学校小学部・中学部学習指導要領総則においては、学習評価の充実について新たに項目が置かれ、学習評価の目的等について明記された。学習指導要領では、学習評価は単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童・生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価することや、授業の改善と評価の改善を両輪として行っていくことの必要性が示されている。

(特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料4、5頁から)

2 特別支援学校における学習評価

改訂された学習指導要領においては、小学校・中学校、高等学校及び特別支援学校の全ての教科等の目標及び内容が、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の育成を目指す三つの柱で再整理された。それに伴い、「観点別学習状況の評価」についても、改訂前の4観点から、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理された。

知的障害者である児童・生徒に対する教育課程においても、各教科の目標に準拠した評価による学習評価を導入し、学習評価を基に授業評価や指導評価を行い、教育課程編成の改善・充実に生かすことのできるPDCAサイクルを確立することが必要とされている。特別支援学校では、児童・生徒の障害の状態や特性、及び心身の発達の段階等を踏まえつつ、この3観点での学習評価を行い、育成を目指す資質・能力の三つの柱の育成がバランスよく実現できるよう留意しながら教育活動の充実を目指していくことが求められている。

そこで本研究では、知的障害特別支援学校における学習評価の基本的な考え方や適切な評価方法を明らかにすることとした。国語・算数の教科を例に、単元ごとの指導の評価から個別指導計画や指導要録の評価への流れについて、特別支援学校の実態に即して具体的な例を示す。

II 研究の目的

知的障害教育における学習評価の考え方を整理するとともに、指導と評価の一体化に向けた有効な方法や事例について、研究・開発を行う。

III 研究の方法

1 知的障害教育における学習評価の基本的な考え方の整理

「特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」(文部科学省)、「指導と評価の一体化を目指して」(東京都教育委員会)等の資料を参考に、知的障害教育における学習評価について研究を行った。具体的には、3観点での評価や、評価規準の作成等について、知的障害特別支援学校における要点や配慮事項を整理した。研究の成果として、「特別支援学校の知的障害教育における学習評価参考資料【理論編】(仮称)」を作成した。

2 単元の構成から評価の総括までの流れの整理及び事例検討

(1) 単元の構成から学期(前期・後期等)ごとの総括的な評価までの基本的な流れについて

小学部の2段階の内容に基づき学習する児童を対象に、国語科、算数科の授業において、特別支援学校小学部知的障害者用国語科及び算数科教科書を活用した授業の学習評価について研究を行った。具体的には、単元の目標設定、評価規準の作成から3観点を評価を行う際の具体的な方法について研究を深め、単元ごとの評価から学期ごとの総括的な評価(個別指導計画における評価)の作成までの考え方を整理した。

(2) 学期(前期・後期等)ごとの総括的な評価から学年末の評価の総括(指導要録の指導に関する記録)までの基本的な流れについて

単元ごとの評価を教科等ごとに総括した個別指導計画(前期・後期等)の評価を踏まえて、学年末の教科等ごとの評価の総括を作成する流れについて整理した。研究の成果として、「特別支援学校の知的障害教育における学習評価参考資料【実践編】(仮称)」を作成した。

IV 研究の成果(成果物の概要)

1 「特別支援学校の知的障害教育における学習評価参考資料【理論編】(仮称)」の抜粋

○ 学習評価の基本的な考え方について

学習評価は、授業等において「児童・生徒にねらいとする力が身に付いたのか」を着実に把握することである。児童・生徒が「何を学ぶことができたか」「何ができるようになったか(伸びたか)」「伸びなかった点はどこにあって、どのように学ぶとよいのか」などが明らかになるとともに、児童・生徒自身に伸びた事実を伝え、賞賛することで、今後の学習意欲の向上につなげることができる。児童・生徒の学習状況を授業や指導計画の改善につなげ、指導と評価をPDCAサイクルとして一体化させることが重要である。

(図1: 学習評価のPDCAサイクル)

○ 学習評価の基本的な流れについて

各教科の育成すべき三つの柱を踏まえ指導計画を作成する。授業を実施し単元ごとに「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点について学習状況の評価する。学期末・学年末には評価の総括を行い、教育課程の評価・改善につなげる。(図2: 学習評価の基本的な流れ)

○ 評価規準の作成について

評価規準は、単元(題材)の目標や指導のねらいが実現されたかどうかを把握するために、期待される児童・生徒の姿について示したものである。文部科学省「学習評価参考資料」等を参考に、指導する教科について、段階ごとの目標・内容、評価の観点及びその趣旨、「内容のまとまり」を確認し、評価規準を作成する。(図3: 評価規準の作成から評価の総括まで)

○ 観点別学習状況の評価に係る記録の総括について

・一人一人の学習状況を観点別に評価し、その記録を単元ごとに重ねていく。

・学期末・学年末には、各教科の観点別学習状況の評価を総括する。児童・生徒がどの教科の学習に望ましい学習状況が認められ、どの教科の学習に課題が認められるのかを明らかにすることにより、個別指導計画の実施状況の評価と、教育課程全体を見渡した学習状況の把握と指導や学習の改善に生かすことを可能とするものである。

・観点別学習状況の評価に係る記録の総括の際は、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を文章で端的に記述して表すこととなるが、常にこの結果の背景にある児童・生徒の具体的な学習の実現状況を思い描き、適切に捉える必要がある。

(図3: 評価規準の作成から評価の総括まで)



図1 学習評価のPDCAサイクル



図2 学習評価の基本的な流れ

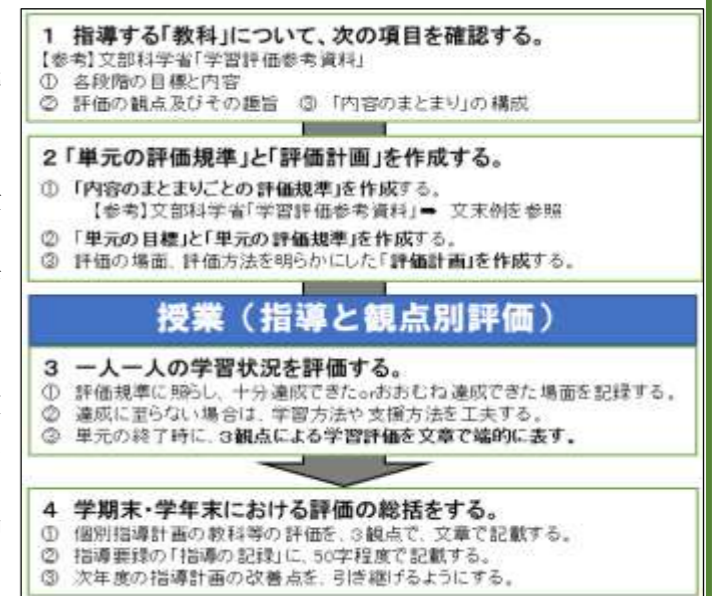


図3 評価規準の作成から評価の総括まで

2 「特別支援学校の知的障害教育における学習評価参考資料【実践編】(仮称)」の概要

小学部の2段階の内容に基づき学習する児童を対象に、国語科、算数科の授業において、特別支援学校小学部知的障害者用国語科及び算数科教科書(「こくご☆☆」「さんすう☆☆」)を活用して、年間指導計画の作成から単元の構成を行い、単元の評価から評価の総括までの流れについて研究した。研究の際は、委員の所属校において検証授業を実施し、対象となる段階の児童を想定した単元計画及び評価文案の作成に取り組んだ。

- (1) 国語科、算数科の評価の考え方について
 - ・「各段階の評価の観点及びその趣旨」(「特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」文部科学省)の内容を理解した上で、「内容のまとまりごとの評価規準」の作成の手順を具体的に示した。
- (2) 国語科、算数科の単元計画について
 - ・「こくご☆☆」「さんすう☆☆」を使用した単元について、評価規準、目標を設定し、指導から評価の実際までの例を示した。

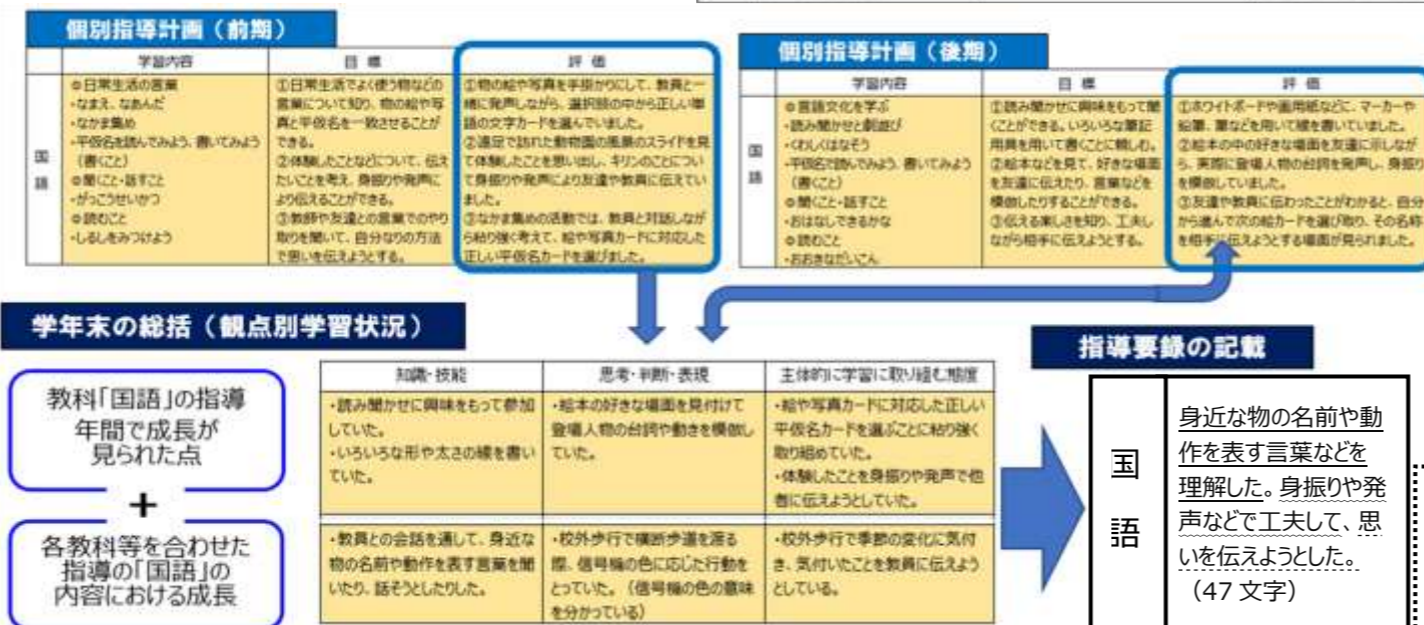
各事例について、「単元名」「内容のまとまり」「単元の目標」「単元の評価規準」を例示した。

授業場面での「評価の実際」を観点別に示し、評価の総括を作成した。

【事例】小学部第3学年 国語科 2段階		
1 単元名「なかまを あつめよう」(こくご☆☆ P52~P57 あつめてみよう)		
2 内容のまとまり(2段階)		
【知識及び技能】ア 言葉の特徴や使い方		
【思考力、判断力、表現力等】A 聞くこと・話すこと		
3 単元の目標		
(1) 身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れる。 (知識及び技能) ア(ウ)		
(2) 体験したことなどについて、伝えたいことを考えることができる。 (思考力、判断力、表現力等) Aウ		
(3) 言葉を通じて積極的に人に関わったり、思いをもちたりしながら、教師や友達との言葉でのやり取りを聞いたり、伝えたりしようとする。 (学びに向かう力、人間性等)		
4 単元の評価規準		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れている。	「聞くこと・話すこと」において、体験したことなどについて、伝えたいことを考えている。	言葉を通じて積極的に人に関わったり、思いをもちたりしながら、教師や友達との言葉でのやり取りを聞いたり、伝えたりしようとしている。

7 評価の実際		
(1) 「知識・技能」の評価 複数の物の中から「遠足で使うものはどれですか?」と聞くと「水筒」や「リュック」を選びました。実物でも、絵カードでも、ほぼ確実に選べるようになりました。発話当初不明瞭でしたが、教員が手拍子と共に「リュック(2拍)」「水筒(4拍)」とカードを読み上げると、同じ拍数で声を出し模倣するようになりました。		
(2) 「思考・判断・表現」の評価 「どうやって使うのですか?」の質問に対して、実物を扱いつつ「水を飲む・水筒をリュックに入れる・リュックを背負って歩く」などの動作を交えながら伝えました。動画や写真を手掛かりに遠足を振り返る活動では、キリンの写真を見ると体がとても大きかったことや首が長く伸びてくわしたことが、見たことや体験したことを思い浮かべて身振りや発声により友達や教員に伝えていました。		
(3) 主体的に学習に取り組む態度 絵カードの名称を思い出せず、自ら発声することが難しい場面では、教員が絵カードを読み上げる様子をよく見て名称を思い出そうとしていました。また、選んだ絵カードの名称について、身振りや発声しながら自ら発声し、教員や友達に伝わったことが分かることと更にすすんでもう1つの絵カードを選び取り、周囲に名称を伝えようとしていました。		
8 観点別学習状況の評価の総括		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
児童A 「遠足で使うもの」を理解し、実物でも絵カードでも正しく選び取りました。声を出し、言葉を模倣するようになりました。	活動を振り返り、自分が体験したことや気付いたことを思い浮かべ、身振りや発声により友達や教員に伝えていました。	教員が絵カードを読み上げる様子をよく見て名称を思い出し、自ら発声して伝えようとしていました。周囲に伝わったことが分かること、更に伝えようと活発に活動していました。

- (3) 学期(前期・後期等)ごとの総括的な評価から学年末の評価の総括までの流れを示した。本資料の例示は、国語の例である。



V 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 小学校・中学校及び高等学校の各教科における学習評価の考え方を基に、特別支援学校(知的障害)における学習評価の基本的な考え方や手順を整理した。
- (2) 特別支援学校では、児童・生徒の障害の状態や特性、及び心身の発達の段階等を踏まえつつ、3つの観点で学習評価を行う際、具体的に定めた指導内容、実現状況等を文章で端的に記述することについて示した。
- (3) 研究の対象とする段階の児童の実態を明確にした上で、単元の構成から評価の実際までを具体的に示した。特に、特別支援学校小学部知的障害者用国語科及び算数科教科書を活用した授業について研究を深めたことで、教科書の解説や学習指導要領に基づいた単元目標や評価規準を設定することができた。
- (4) 検証授業を実施したことにより、対象とする段階の児童を想定した具体的な評価の実際の場面を設定し、評価の文案を示すことにより、学校が評価を作成する際の参考にできるようにした。

2 課題及び今後に向けて

障害のある児童・生徒に係る学習評価については、児童・生徒の障害の状態等を十分理解しつつ、様々な方法を用いて、一人一人の学習状況を一層丁寧に把握することが必要である。その際は、児童・生徒の学習状況の評価を行う場面や、具体的な評価方法について、評価計画を立案する等の工夫が必要である。

そのため、今後は本研究の成果物である「特別支援学校の知的障害教育における学習評価参考資料【理論編】【実践編】(仮称)」の普及を図るとともに、特別支援学校小学部知的障害者用教科書を活用した指導事例や評価文案等を蓄積し、事例研究等を深めていく。具体的には、今回取り扱った国語、算数以外の教科についても、学習評価の基本的な流れに基づく指導事例を積み上げていく。各学校において、本研究の成果物を活用し、学習指導要領の趣旨に沿った学習評価の在り方について理解を深め、児童・生徒に必要な資質・能力を確実に育てていくことを目指す。

委員名簿

学校	役職	氏名
東京都立小平特別支援学校	校長	阿部 智子
東京都立城東特別支援学校	主幹教諭	熊井戸 佳之
東京都立大塚ろう学校	主幹教諭	笹野 泰賢
東京都立小平特別支援学校	指導教諭	椎名 久乃
東京都立羽村特別支援学校	主幹教諭	田中 孝志郎
東京都立調布特別支援学校	主任教諭	柴田 亜伊子
東京都立武蔵台学園	主任教諭	重政 卓也
東京都立立川学園	主任教諭	天田 哲平

担当 教育庁指導部特別支援教育指導課 指導主事 宮田 愛